琉球大学学術リポジトリ

沖縄農業研究会35年のあゆみ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017139

Ⅰ．沖縄農業研究会35年の歩み

1．創立および1962年～1971年

1）沖縄農業研究会設立趣意書

盛春の候益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

さて戦前の沖縄農業が台湾と本土の研究成果をもとにして来た結果沖縄の諸条件を合理的に農業へ導く努力があまりなされておらず，現在でも非科学的な農法がいたるところにみうけられます。その上今次大戦以後日本本土との技術的な連けいが隔絶されて来たために，戦後著しく進歩した農業技術をとり入れることなく現在に至っており，他面経済事情の変革により今や沖縄農業は一大転換期の岐路に立たされています。

この転換期に立つわれわれは，農業指導者の集いを作り，たがいに密接な連けいを保ちながら農業の研究およびその普及に，より一層の努力を払い，沖縄の農業を合理化して行かなくてはなりません。

さいわいにして数年前から農業指導者間にこの種の研究会を結成しようとの動きがあり，それ以来設立の気運が高まってまいりました。そして去る3月26日に琉大，琉農試，植防，政府農務課，特産課，農業改良課および琉大農学科卒業生の有志が集まり設立準備委員会を結成し，その設立を準備して来ました。

この会が設立された暁には新技術の考案・導入が容易になると共に，ただちに普及組織に導入されることと思います。

つきましては別紙規則案を御参照になり是非御入会の上で協力下さいますようお願いします。なお設立総会を5月19日（土）に開き，ひき続き記念講演と会員の研究発表会を持ちますのでふるってご参加下さい。

1962年4月10日

沖縄農業研究会設立準備委員会

琉球政府　農務課

〃　特産課

〃　農業改良課

〃　植物防疫所

〃　農業試験場・模範農場

琉球大学農学科教授職員

琉球大学農学科卒業生一同

2）創立10周年記念大会

（1971年11月27日10周年記念大会琉球大学農学部ビル501教室）

（1）主な行事

特別講演

沖縄農業の将来

琉球大学農学部教授　福島栄二氏

感謝状授与

故島袋俊一氏，新城幸吉氏，アジア財団

沖縄農業関係文献目録（Ⅰ）刊行

（2）会長あいさつ

高良鉄夫

本日ここに関係機関の方々ならびに会員多数ご参加を得て，10周年の記念式典を挙行いたしますことは本研究会のもっとも光栄とするところであります。

式典を行うに当り創立以来多年にわたって本会に尽くされた方々の功績を讃えその労苦をねぎらうとともに本会の発展を祝うことのできますことは会員にとってこの上もない喜びであり，また感激ひとしおであります。

かえりみますと本研究会は戦後沖縄の農業復興が軌道にのった1960年頃から発会の準備を進め，1962年5月に創立したのであります。初代会長に島袋俊一氏を推挙し新しい科学と技術の開発を求めて発足いたしました。

爾来10年，琉球政府農林局，アジア財団，その他関係団体の援助と協力を得て，沖縄農業の発展に努力してきたのであります。

その間，本会としては各種の調査研究をはじめ，特別講演会，研究発表会などを継続的に開催し，また年2回の機関紙を発行するなど充実した成果をあげてきました。1966年7月には日本熱帯農業学会と共同し，沖縄ではじめて盛大な学会を開催いたしましたことは本会の歴史の1頁をかざる特筆すべきことであります。

また会員各位の研究成果は沖縄の農業教育にあるいは行政に，さらに農業改良，土地改良の普及など各分野にわたって活用されています。

このように沖縄農業研究会は過去10年の間に著しい進歩をとげました。

さて研究活動を活発にし，より効率的な成果をあげ，かつ将来の研究を約束するためには過去の研究の歩みを知ることが必要であります。ところが沖縄では今日まで過去の農業研究や資料を総覧し得る文献目録がなく研究上不便を痛感していました。

沖縄の農業に関する報文や資料は1400年以来数多くの文献に登載されています。これらの報文や資料は沖縄の農業生産の向上に，あるいは経済発展に重要な役割を果たしてきました。しかるに第２次大戦においてほとんど失われ，あるいは散逸の憂き目に会い，その所在すら明らかでなかったのが多いのであります。

本会では創立10周年を記念し，万難を排して念願の総目録を作成いたしました。まことに喜びにたえないことであり，本会の誇りとするところであります。

このような輝かしい発展と誇りはここに述べるまでもなく，会員相互の信頼と理解と協力ならびに役員の積極的かつ献身的な尽力のたまものであります。ここに深く感謝の意を表します。

思うに，今日の科学技術は驚異的な進歩をとげ，また世界の経済事情も急速に進展しており，それとともに世界の農業も大きく変動しつつあって，内外の諸情勢は沖縄の農業の進路を定めるに容易ならぬものがあります。ご承知のように沖縄の農業はいろいろな問題をかかえており，しかも本土復帰を間近にひかえて改革を要望されています。

本会は沖縄の農業の現状を直視しつつ，将来への展望に立って最大の努力をはらわねばならぬ責務を痛感するものであります。

本会では10年の歴史の上に立ってその使命を十分に果たすべく新しい情熱を呼びおこし，より一層の努力をする所存であります。

会員各位には今後とも積極的かつ意欲的な不断の研究活動にとりくんで頂くよう切望し，その成果を期待するものであります。

最後に本会にご援助，ご協力下された方々のご芳情に対し，厚く御礼申し上げて式典の挨拶といたします。

（1971年11月27日）

2．1972年～1981年

1）主な行事・日本本土へ復帰（1972年５月15日）

日本熱帯農業学会との合同講演会

（1975年10月25・26日）

沖縄農業関係文献目録（Ⅱ）刊行（1981年）

創立20周年記念式典

1981年11月６日　パシフィックホテル

あいさつ　　会　長　高良鉄夫

経過報告　　副会長　宮里清松

感謝状贈呈

社団法人沖縄県造園建設業協会

代表者　尚　　詮　氏

（有）東南植物楽園

代表者　大林正宗　氏

沖縄県緑化種苗協同組合

代表者　尚　　詮　氏

（株）金城キク商会

代表者　金城直樹　氏

（資）高倉フルーツ苑

代表者　高倉幸一　氏

琉球産経（株）

代表者　新垣義雄　氏

玉泉洞観光（株）

代表者　大城宗憲　氏

2）20周年の経過報告

副会長　宮里清松

沖縄農業研究会の20ケ年の経過をご報告申し上げます。

本会が結成されたのは昭和37年(1962）であります。それ以前から農業関係者の間で，互に連絡をとり，情報を交換し，励まし合いのできる組織が必要ではないかとの声がありましたが，機が熟せず何年か経過しました。

結成前後の社会的背景の一つに，日米両政府の援助が拡大され，国際的には貿易自由化の波がおし寄せつつあり，第一次産業の体質改善が迫られている状況で一つの転換点に立たされていました。そろそろ潮時ではないかということで，当時の琉球政府の農務課，特産課，改良課，試験場，植物防疫所，それに琉大農学部の有志が集まり，準備委員会を作り，数回に互って会合を重ねてきました。そこで会則案，投稿規程案，設立趣旨書を作り，会員の勧誘，会誌一号に掲載する原稿募集，広告のお願いに走り廻り，準備作業を進めてきました。

昭和37年5月19日，当時首里にあった琉大の文系ビル101教室で設立総会を開き，同時に記念講演，研究発表が行われました。総会では会則，投稿規程が審議可決され，予算の報告があり，会長に島袋俊一，副会長に高良鉄夫・古堅文太郎の3氏が選任され，評議員，庶務・会計・編集の幹事が決まり本会が発足しました。当日の出席会員数は200名を越え，記念講演2題，一般講演8題が発表されました。その後，毎年総会・研究発表を行い，年によっては記念講演または特別講演をお願いし，シンポジウムが開かれました。

特別講演・記念講演は合わせて今年で約30題に及んでいます。それを大別すると，1つは沖縄農業の問題点・進路・可能性などに関するもの，2つには，例えば甘藷テングス病，サトウキビのモザイク病・矮化病，安全な農薬の開発，今回の農業災害など，それぞれの時点で直面している問題をとり上げたものに分けることができます。それらの中には沖縄の人以上に沖縄を愛し，沖縄農業の発展に情熱を傾けられたハワイ大学のヘンリー仲宗根教授の「沖縄農業の可能性」という題の特別講演が含まれています。また10周年には福島栄二教授の「沖縄農業の将来」の記念講演がありました。

シンポジウムは本会単独で3回，日本熱帯農業学会との共催で2回，計5回開かれました。第1回は昭和39年に「沖縄農業の打開と進路」の課題で稲嶺一郎・平野俊・喜久川宏の3氏を話題提供者に開かれました。日本熱帯農業学会共催の第1回目は昭和41年に「熱帯農業に対する沖縄の寄与」の課題で行われ，その概要は琉大農学部発行の「農家便り」129，130号に掲載しました。その後，昭和50年に「沖縄における農業の振興とその技術的問題点」，昭和51年に「サトウキビ生産の問題と今後の方向」，昭和55年に「沖縄における地域農業の問題点とその対策」の課題でそれぞれ開かれました。

本研究会の今1つの活動に会誌の発行があります。会誌「沖縄農業」は昭和37年，設立総会の時に第1巻第1号を発行しました。編集後記によると「会誌1号を創立総会の日に発行するのはいささか気の早い話であるが，計画倒れに終わることを自らいましめるためにとった手段であった」とあります。編集幹事は“3号誌になるな”を合言葉に仕事を進めてきました。ご承知のように“3号誌”とは当初意欲を燃やして新しい会誌または雑誌を出版するが，途中で息切れして3号で終わってしまうということで，いくつかの意味に使われますが，編集幹事は自らを引きしめ，戒め，励ます意味で使ってきました。当時出版物を出すときには米国民政府の認可が必要でありましたが，会誌を印刷して後，大急ぎで必要な書類を整えて手続きし，許可を得るというハプニングもありました。

会誌は年2回発行を原則としましたが，資金その他の都合で合併号を出したこともあり，昭和55年の会誌で26号になりました。掲載論文の数は合計256編，広告数が延124件に及んでいます。会誌は会員の論文が主体ですが，会員以外の方にもお願いして沖縄農業に示唆を与える論文も掲載しました。例えば渡辺正一香川大学教授の「パインアップル産業合理化上の諸問題」(連続4回)ヘンリー仲宗根ハワイ大学教授の琉球農業の改善に関する論文などがあります。更に情報を提供し共に考えようという主旨で資料も掲載しました。例えば「琉球政府・砂糖貿易自由化阻止に関する要請書」「琉球政府・琉球パイン産業合理化計画」などがあります。

会誌とは別に10周年を記念して，論文題数8,146編を

整理した「沖縄農業関係文献目録Ⅰ」を発行し，関係者に広く活用されていますが，今回，更に20周年を記念して「沖縄農業関係文献目録Ⅱ」を作り，本日お配りしました。前回掲載もれになった昭和45年までの追加，307編と昭和46年から55年までの文献4,099編，合計4,406編を整理してあります。

その他にもいくつかの活動がありますが，その中一つだけ申し上げます。昭和50年１月，行政需要に対応して沖縄県職員定数の再配置が検討され，その中で農業関係職員，特に現業部門の大幅削減案が出されました。本研究会では２月４日，緊急に評議員，幹事の合同会議を開き，“農業見直しの振興計画に逆行するものであり，再考してもらいたい”という主旨で要請文を作成し，会長，副会長，評議員，幹事が揃って県知事，県議会議長，議会議員各位に要請文を渡し，再検討をお願いしました。

昭和47年は日本復帰という歴史の転換点に立たされ，会員は各職場で，それぞれの立場で問題を抱えてその処理に頭をいためましたが，本研究会も例外ではありませんでした。復帰後も本会を存続するべきか否かについて検討されました。復帰すれば会員はそれぞれ所属する学会で活躍することが期待されるので本研究会の影はうすれ，存続は困難ではないかとの考え方もありましたが，他方農業の試験研究及び教育は環境条件に大きく影響されるが，地理的条件，歴史的背景，研究対象となる土壌，生物に独特のものがあること，地域社会に密着した試験研究及び普及・教育を続ける上で関係者が絶えず情報を交換し，協力してこそ成果が期待されること，などの理由で存続されてきました。最近，沖縄における農業の重要性は益々高まってきました。第二次振興計画では一次産業及びそれに関連する二次産業を１つの大きな柱にという声も高まり，国際協力，対外援助との関連で1次産業を中心にした国際センターの沖縄設置が決まり，更にエネルギー対策の一環として，代替エネルギーについては沖縄の地理的条件が注目されてきました。登録正会員324名（県外８名），賛助会員12社を擁する本研究会並びに各会員の果たす役割も益々大きくなりました。

先輩の方々，賛助会員のご指導，ご援助があり，会員相互の協力で20才の成人式を迎えましたが，今後とも各位の一層のご指導とご支援を仰ぎ，会員の努力で，本研究会が益々発展することを期待して“20年の歩み”の報告を終ります。

（昭和56年11月６日）

3．1972年～1997年

1）主な行事

シンポジウム「沖縄県における野菜生産の現状と問題点」開催（1987年７月27日）

沖縄農業関係文献目録（Ⅲ）刊行（1991年）

創立30周年記念式典

1991年（平成３年）11月26日　那覇市，ゆうな荘

あいさつ　会長　泉　裕巳

経過報告　副会長　大屋一弘

感謝状贈呈　高良鉄夫氏，宮里清松氏，森田郁太郎氏，島村盛永氏，大城守氏，内原英昇氏

創立30周年記念シンポジウム

「転換期に立つ沖縄農業の課題と展望ーミバエ根絶後の園芸振興に向けた戦略的課題ー」

開催　1991年（平成３年）11月29日　ゆうな荘

地域懇話会「さとうきび生産技術セミナー」

開催　1997年11月16日，久米島仲里村

2）30周年の経過報告

副会長　大屋一弘

沖縄農業研究会30年の歩みを報告させていただきます。

本会は昭和37年５月に産声を上げ，今年30年を迎えることになりました。本会創立時の状況については，20周年記念式典における宮里清松氏（当時副会長）の経過報告に詳しく述べられておりますが，当時の熱意ある先輩有志により，沖縄農業の向上，発展並びに会員相互の連携を図ることを目的として創立された訳で

あります。以来，我々会員はこの目的に沿った事業と活動をして参りました。例えば一つに沖縄農業に関する自発的な調査研究や外部機関からの受託研究であります。自発的な研究はまさに無数であり，受託研究も5件を数えております。二つに研究発表会でありますが，これは毎年行っており，毎回10題前後の発表があります。三つに機関紙「沖縄農業」の発行であります。現在までに26巻通算36号を発行しましたが，毎号7題前後の研究・調査報告などを掲載し，成果を公表しております。

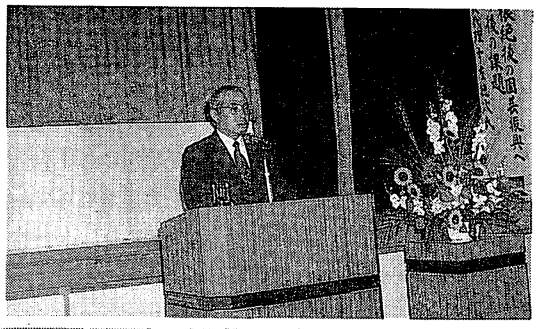
以上の他に時勢に応じたテーマでシンポジウムと特別講演会を隔年毎に開催するなど，沖縄農業の問題認識に研鑽努力を重ねて参りました。今回もこの式典の後，「転換期に立つ沖縄農業の課題と展望―ミバエ根絶後の園芸振興に向けた戦略的課題―」と題したシンポジウムを行うところであります。出版物としては創立10周年目と20周年目には沖縄農業に関する文献を整理収録して「沖縄農業関係文献目録Ⅰ」(約8,150件収録)と，「沖縄農業関連文献目録Ⅱ」(約4,400件収録)をそれぞれ発行いたしました。さらに30周年記念事業の一貫として，「沖縄農業関連文献目録Ⅲ」を発行すべく準備を進めております。現在本会の会員は317名であります。創立以来会員の入れ替わりが多少ありましたが，ここ数年は大体この程度で推移しております。会員数及び予算規模ではプラトー状態にあり，会の運営もやや安定かと思われます。しかし，これが会活動のマンネリ化につながらないよう気を引き締めなければなりません。

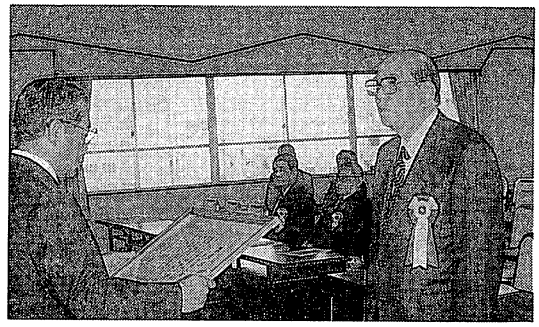
今は地方の時代，更に情報化時代などと叫ばれております。地方の時代とは農業的にも沖縄の特色が求められることと考えます。沖縄の自然条件は，夏の台風や干ばつ，高温多湿による病害虫多発や地力消耗，豪雨による土壌流出，冬期の強い季節風，その他農業的にはきびしいものがあり，このような自然条件下で農業の特色を出すには一方ならぬ創意と工夫が必要であります。情報化時代とは，情報の公開，情報の発信・受信を敏速にし，生活や仕事に役立てることでありましょう。情報は縦には比較的スムースに流れるようですが，横への流れはややもするととどこうりがちに思われます。

本研究会創立の主旨は，見方を変えればまさに特色ある沖縄農業の振興に創意工夫を凝らし，情報の横の流れを促し，沖縄農業に役立てることにあった訳です。初心忘れるなかれ，すなわち我々会員が，本会創立の主旨を肝に銘じ活動するなら，本会の存在意識は益々大きくなると確信するものであります。沖縄農業研究会は30才になりました。しかし人生80余年に比べるとまだ青二才であります。先輩各位，関係機関各位，並びに賛助会員各位におかれましては，変わりないご指導，ご援助をくださいますようお願いして経過報告を終わります。

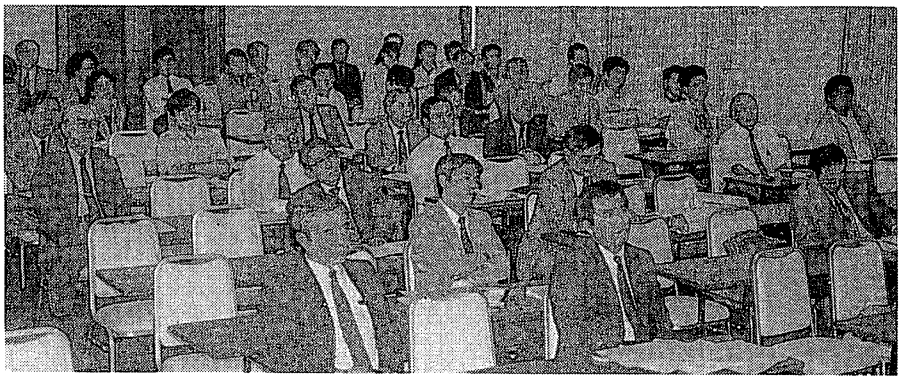
(平成3年11月26日)

本研究会発行の沖縄農業関連文献目録





創立30周年記念式典・感謝状贈呈のスナップ



30周年記念シンポジウム